

「Runner」／爆風スランプ 「埠頭を渡る風」／松任谷由実 「ツバメ」／YOASOBI  
～J-POP CLASSIC CLUB TOKYO（東京音大）～

子どもの権利擁護委員 関谷 道夫



明るく楽しそうに演奏し、唄っている若い音大生の姿を見ていると、聴いている側も元気と活力が湧いてきます。ボーカル、コーラス、ピアノ、弦楽器が意気投合して、若々しく生き生きとしたハーモニーが生まれています。弦楽器が安定していて、編曲も素敵で、特に、男性のピアノの音色の切れ味が光っています。ミュージカルのような爽やかな歌声と演奏で、心が軽やかになってきます。飾りのない“素人っぽさ”がむしろ魅力となっています。

「J-POP CLASSIC CLUB TOKYO」は、東京音楽大学に学ぶピアノ、声楽、弦楽器、作曲の各専攻の学生有志が集まって結成された音楽ユニットです。歌謡曲、ニューミュージックなどと呼ばれていた頃のヒット曲（J-POP）を、弦楽器を中心に編曲して、軽やかに演奏しています。村下孝蔵「初恋」などは“振り子細工”のように胸も揺れます。高齢者が若い時に心時めかせた曲ですが、今の若い人にはどう映っているのでしょうか。

音楽は「音による芸術」と定義されますが、文字通り“音を楽しむ”と書きます。そのとおりで、若い学生がユニットを組んで楽しみながら演奏しています。音大生ですから、いつもはクラシックを中心に学んでいるのですが、畏まらずに、自由に、快活に演奏している様子は、音楽教育のこれからのあり方を暗示させてくれます。もっとはみ出してほしいと願いながら、毎回、楽しんでいます。



音楽と言えば、音楽の持つ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、生活の質の向上、行動の変容などをめざしている「音楽療法」という分野があります。これに好感を抱いて、ずっと関わってきました。もともと、エビデンスベースト（※1）の行動・認知を変容させるアプローチよりは、言葉や音楽や絵画や舞踏などを活用した“訳の分からない”心理療法が好きです。生い立ちからして、心理療法は「対話（お話し）」を重視した至極曖昧なものなのです。この曖昧さ・不確実さに向き合うことなく、定型的なプログラムやレシピを求める臨床家をあまり信用していません。

音楽療法に関しては、青森音楽療法研究会（佐々木純子理事長）の活動を高く評価しています。趣旨に賛同し、音楽療法士の養成研修の講師にも参加しています。受講者には、広範な人に活力をもたらす音楽の力を訴えています。

かげりのない少年の季節はすぎさってく  
風はいつも強く吹いている  
(Runner)

今、音楽大学は「苦境」「崩壊」「凋落（※2）」「淘汰」の言葉で語られ、入学者減で音楽大学の存続自体が危機に瀕しています。音楽大学の学生数は、全体としてここ20年減少の一途を辿（たど）っています。名門といわれる首都圏私大でも定員割れを起こしています。経営難で学生募集を停止した音大も出現し、この傾向は加速すると見られています。音楽の優雅さと楽しさとは別に、厳しい現実があります。

この流れは、音楽に限らず、美術など**芸術全般**に言えることです。音楽大学・女子大の危機、文学・哲学などを含めた人文社会科学系の後退などの背景には、**実用的な専門技能・成果主義**を重視する時代的な要請があります。もちろん、旧態依然の型にはまった教育内容などの問題もあるのですが、国立大学の「人文社会科学系学部」廃止騒動、理系分野への誘導の方向にみられるように、大学に**専門的実学教育**を要求する風潮は、日本社会の方向性を如実に反映しているように思います。

「音楽では食えない」「つぶしがきかない（※3）」「音大は就職に不利」と言われ、音楽大学の衰退が顕著です。グローバル化・市場原理・成果主義・経済優先・実利主義・理系や専門教育重視・資格重視などの激しい流れに抗し切れなくなったからでしょう。しかし、それで良いとは決して思いません。目先のことを考えれば、短期的な利益に繋がる合理的な選択肢なのかもしれませんが、**大きなものを見失っている気がします**。しっかりした倫理観や大局観が無ければ、再び**失敗の轍**（てつ）を踏む（※4）恐れがあります。日本の芸術・哲学・精神文化の劣化・衰退、日本社会の思考力・構想力に直結する重大な問題となる気がします。特に、若い時は、日本独自の硬直した文系理系の進路分けに縛られずに、多彩な学びにチャレンジし、多様な知識と経験を積み上げる発想が必要だと感じています。

もうそれ以上 もうそれ以上  
やさしくなんてしなくていいのよ  
いつでも強がる姿好きだから  
（埠頭を渡る風）

医学やITなどの実用的な学問が幅をきかせている時代に、一方で、「リベラル・アーツ」（liberal arts）教育が注目されてきています。リベラル・アーツは、**自由な知的探究のための学芸**であり、**生きるための力を身に付ける学問領域**です。グローバル化やテクノロジー化の進行、多様化・複雑化した価値観の時代に、硬直した観念に捉われることなく自由な発想ができることを重視しています。「個人の能力を開花させ、困難や多様性、変化へ対応する力を身につけさせ、科学や文化、社会などの幅広い知識とともに、より深い専門知識を習得させるための学習方法」「明確な答えがない問題や課題を解決していくための知識やスキルを習得する学問」と説明されます。

多様化・複雑化・複合化する社会における「**答えのない難問**」を解決するには、特化した専門領域の知識だけでは有効な答えが出てきません。幅広い知識を持ち、**さまざまな角度から物事を多角的・横断的に考える柔軟な思考**が必要です。

具体的に例を挙げるとすれば、「少子高齢化・未婚化の進行、歪な人口構成、急激な人口減少社会」という喫緊の課題があります。世界の中で日本は少子高齢化のトップランナーです。こうした先の見えない、日本の命運を左右する難問を読み解こうとすると、重視されるべきものが浮かび上がってきます。限定された専門的思考の枠組みだけでは片付きません。**包括的な思考の上に、叡智を集め、有効なビジョンやプランや戦略や最適解を打ち立て、指導力を発揮してそれを実行し、結果を出せる優れた人材**が必要です。

昔は、学校でも、受験とは関係のない書道や美術や音楽の“ちょっと変わった先生”の姿に心が和みました。書家で俳人の故宮川翠雨<sup>みやかわすいう</sup>先生を思い出します。心配されたのか夜遅くまで若い時の話をしてくれました。豊かな時代でした。小中高生の子どもには、さらに、リベラル・アーツ的な学びと姿勢が必要だと考えています。



現在の日本の状況を俯瞰して、むしろ、音楽を含めた文化芸術、文学・哲学、そしてこれからの日本社会の未来をリードする政治・経済などの人文社会系に、日本の最も優秀な頭脳が集まることを妄想しながら、音大生の爽やかな演奏を聴いています。先の見えない分野で学ぶ若者にエールを贈りたいと思います。

大学で育んだ“訓練された感性”が役立つ時がきっと来ます。

僕らは色とりどりの命と  
この場所で共に生きている  
(ツバメ)

(次回は、Uruの『心得』です。)

※1 エビデンスベースト…統計データなどの科学的根拠に基づいて判断などを行うことを指す。

※2 凋落(ちょうらく)…勢いが衰えて、落ちぶれること。

※3 つぶしがきかない…別のものにできない、切り替えるができない、応用することもできない。

※4 失敗の轍を踏む…前の人と同じ失敗を繰り返す。